



[果樹部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

## 18. ブドウのチャノキイロアザミウマに対する有効薬剤

### [要約]

ブドウに発生するチャノキイロアザミウマに対し、アドマイヤー顆粒水和剤、アーデント水和剤、テルスターフロアブル、ディアナWDG、コテツフロアブル及びトクチオン水和剤が有効である。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 病虫研究室

[連絡先] 電話 086-955-0543

[分類] 情報

---

### [背景・ねらい]

チャノキイロアザミウマはブドウにおける主要害虫の一つである。本虫は薬剤抵抗性が発達しやすいことから、産地では対応に苦慮している。そこで、薬剤感受性を調査し、有効薬剤を選抜し、効率的な防除対策に資する。

### [成果の内容・特徴]

1. ネオニコチノイド系の薬剤では、個体群によるばらつきがあるが、アドマイヤー顆粒水和剤に対する感受性は比較的高い。一方、モスピラン水溶剤及びスタークル顆粒水溶剤に対する感受性は低い。
2. ピレスロイド系のアーデント水和剤及びテルスターフロアブルに対する感受性はおおむね高い。
3. その他の薬剤では、ディアナWDG、コテツフロアブル及びトクチオン水和剤に対する感受性はおおむね高い。一方、トランスフォームフロアブルに対する感受性はおおむね低い。

### [成果の活用面・留意点]

1. 農薬の使用履歴に応じ、本虫の感受性が異なる可能性もあることから、薬剤散布3～7日後に、枝の先端を白い板の上に打ち付ける等の方法により本虫をたたき落とし、生死を観察する。
2. たたき落とした成幼虫が活発に動く場合は当該薬剤に対する感受性が低下しているため、以降は別系統（異なるIRACコード）の薬剤を用い、同一系統の薬剤を連用しない。
3. カブリダニ類等の天敵利用施設では、当該天敵に悪影響の大きい薬剤は収穫後に使用する。なお、天敵に及ぼす影響は日本生物防除協議会ホームページ（下記）で参照できる。  
(<http://www.biocontrol.jp/Tenteki.html>)
4. 農薬使用基準を厳守する。なお、令和5年3月時点で台湾における残留基準が「不検出」の薬剤については非掲載とした。



## [具体的データ]

表1 チャノキイロアザミウマ2齢幼虫の各種薬剤に対する感受性<sup>z</sup>（令和5年3月）

| IRAC | 系統       | 農薬名                        | 希釈倍数  | 農研個体群 | 個体群1 | 個体群2 | 個体群3 |
|------|----------|----------------------------|-------|-------|------|------|------|
| 4A   | ネオニコチノイド | アドマイヤー顆粒水和剤                | 5,000 | ◎     | ◎    | ○    | △    |
|      |          | モスピラン顆粒水溶剤                 | 2,000 | △     | △    | ○    | △    |
|      |          | スタークル顆粒水溶剤                 | 2,000 | ○     | ×    | ×    | ×    |
| 3A   | ピレスロイド   | アーデント水和剤                   | 1,000 | ◎     | ◎    | ◎    | ◎    |
|      |          | テルスターフロアブル                 | 4,000 | ◎     | ○    | ◎    | —    |
| 5    | スピノシン    | ディアナWDG                    | 5,000 | ◎     | ◎    | ◎    | ◎    |
| 4C   | スルホキシイミン | トランスフォームフロアブル <sup>y</sup> | 2,000 | ×     | △    | ×    | ×    |
| 13   | ピロール     | コテツフロアブル                   | 2,000 | ◎     | ◎    | ◎    | ◎    |
| 1B   | 有機リン     | トクチオン水和剤                   | 800   | ◎     | ◎    | —    | —    |
| —    |          | 対照（水）                      |       | ×     | —    | —    | —    |

<sup>z</sup> 食餌浸漬法による処理1日後の補正死虫率を次の基準で分類したもの。なお、—は未調査を示す  
 ◎：補正死虫率90%以上、○：補正死虫率70～90%、△：補正死虫率50～70%、×：補正死虫率50%未満  
 補正死虫率（%）＝（無処理区の生存率－処理区の生存率）/無処理区の生存率×100

<sup>y</sup> カイガラムシ類登録の薬剤で、チャノキイロアザミウマまたはアザミウマ類には適用がない

注 供試虫の由来

農研個体群；令和3年に農研の「ピオーネ」隣接アジサイから冬季に採集しノブドウで累代飼育

個体群1；令和3年に倉敷市船穂の加温栽培「シャインマスカット」から採集しノブドウで累代飼育

個体群2；令和4年に倉敷市船穂の収穫後の「マスカット・オブ・アレキサンドリア」の2番成り果実から採集

個体群3；令和4年に倉敷市船穂の収穫後の「マスカット・オブ・アレキサンドリア」の2番成り果実から採集

## [その他]

研究課題名：ブドウ栽培におけるアザミウマ類の総合的防除技術の確立

予算区分・研究期間：交付金（病害虫等防除総合対策事業費）・令3～5年度

研究担当者：高馬浩寿、薬師寺賢

関連情報等：1）試験研究主要成果、平17（31-32）、平25（49-50）